様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ００６６７

研究課題名（和文）地域制公園の自然保護制度を活かした文化資源の保護と協働に関する研究

研究課題名（英文）Conservation of Cultural Resources and Collaborative Management Using Nature Conservation System Which Has a Zoning Scheme

研究代表者
山本　清龍（Yamamoto, Kiyotatsu）

東京大学・大学院農学生命科学研究科・准教授

研究者番号：５０３２３４７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：わが国の地域指定制の自然保護地域では，自然だけでなく，地域内の人の居住，生業，伝統，慣習など文化の保護を含む管理計画が必要であるが，価値ある文化に関する情報の共有，文化資源保護のための協働の方法論と協働体制の構築が必要である。そこで本研究では，まず，協働や合意形成の際に利用できる，自然保護地域内の生業，伝統や慣習を含めた価値ある文化インベントリーとその分布図を作成した。また，ワークショップや勉強会の開催を通して，地域の利害関係者とともに文化インベントリーの再評価を行い，価値認識の構造を把握した。さらに，自然保護制度との融合を企図しつつ，自然保護地域における文化資源の保護方策を提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
自然保護を主目的とする地域指定制保護地域の制度の中で文化資源の保護を図ることを意図した点に特徴があり，従来，分断されていた自然保護行政と文化財保護行政を統合し，自然保護地域の中で人が協働し合意形成を図る過程を通して方法論や制度論について探求する実践的な研究と考えられる。里山，里海など，わが国の自然に対する人の関わりを自然保護地域の中でまもり，伝え，地域の資源として位置づけようとしている。

研究成果の概要（英文）：In order to establish a management plan of protected natural area which has the zoning scheme in Japan, it is necessary to program the conservation of cultural resources such as residence and livelihood of local people, and tradition and custom into the plan. It is also needed to create methodology and regime for the conservation of the resources. From the viewpoint of this, this study created an inventory and a map which showed valuable cultural resources in protected areas, and reevaluated the inventory through workshops and study sessions which local people participated as well. In addition to those, the study proposed a measures for the conservation of cultural resources in protected natural areas.

研究分野：造園学，観光学

キーワード：世界遺産　自然公園　文化　協働　白神山地　富士山　岩手山　三陸

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

公園には営造物と地域制があり，それぞれに利点があるが，わが国がとる地域指定制の自然保護地域では自然資源だけでなく，地域内に人が居住することから，生業，伝統，慣習など文化資源の保護を含む管理計画が必要である。とくに，近代的保護地域制度との融合，保護地域管理者と伝統的聖地管理者の協働は課題であり，価値ある文化資源の存在については地域で十分に共有されていない。事実，地域の利害関係者が参画して策定する国立公園の管理計画書に明記される文化資源は少なく，わが国の地域指定制保護地域が抱える課題の一つである。そこで，地域制公園の自然保護制度を活かし，価値ある文化に関する情報の共有，文化資源保護のための協働の方法論と協働体制の構築を企図した。

２．研究の目的

わが国の国立公園等の自然保護地域を研究対象地として取り上げて，地域に残された価値ある文化資源の保護とその情報の共有，再評価，協働を通した保護方策の立案に寄与することを企図した。具体的には，①生業，伝統や慣習を含めた価値ある文化インベントリー（目録）と分布図を作成すること，②地域の利害関係者とともに文化インベントリーの再評価を行い，価値認識の構造を把握すること，③自然保護地域における文化資源の保護方策を提案すること，の３点を目的とした。

３．研究の方法

研究対象地として白神山地（世界自然遺産，自然環境保全地域），岩手山（十和田・八幡平国立公園），三陸沿岸部（三陸復興国立公園），富士山（世界文化遺産，富士箱根伊豆国立公園）を取り上げた。調査方法は，文献調査，フィールド調査，ワークショップと勉強会，アンケート調査等である。まず，文献調査では，生業，伝統や慣習を含めた価値ある文化インベントリー（目録）と分布図を作成することを意図して文献を収集し，地域情報を整理した。次に，フィールド調査を通して，自然保護地域内の有形・無形の文化資源情報の収集とマップ化を行った。さらに，文化に関する価値認識とその構造，自然保護や防災等との価値観の対立構造，ワークショップの議論による意識の変容を把握，整理することを意図して，自然保護地域内の利害関係者が参加するワークショップと勉強会を開催し，文化資源の再評価を行った。最後に，アンケート調査では，自然保護地域を訪れる来訪者の意識調査を実施し，文化資源の享受，利用の実態把握，評価を把握した。

４．研究成果

（１）白神山地

文献調査を通し，白神山地では，自然保護運動が青秋林道開発計画を中止に追い込み，それを契機に世界遺産登録された歴史，マタギの持続可能な地域資源利用など，原生自然だけでなく価値ある地域固有の文化を確認できた。そこで，情報提供施設としてのビジターセンター（以後ＶＣ）に着目し，白神山地ＶＣの利用の実態を明らかにし，来訪者の関心，理解の把握を通して，ＶＣが持つ地域情報の発信の役割について考察することを目的とする調査を実施した。

調査方法は，行動観察調査とアンケート調査の２つの調査を実施し，補足的にヒアリング調査を実施した。まず，行動観察調査は，暗門の滝の冬期通行止めが解除され，多数の来館者が予想された 2017 年の夏季に，白神山地ＶＣにおいて行動観察調査を実施した。具体的には，ＶＣ利用者が関心を持つ展示の把握を企図し，展示ホール内をエリア区分した上で，10 分ごとに各エリアを巡回し，調査員が各エリアに入った瞬間の利用者の行動と注視方向の展示を記録した。次に，アンケート調査は，世界遺産地域内のアクアグリーンビレッジ ANMON（以後 ANMON）との比較を通して，遺産地域入口にあるＶＣの役割，情報提供戦略の導出を企図し，ＶＣと ANMON の利用者を対象とする調査を実施した。ＶＣにおける調査は，夏休み期間と紅葉期を含み，利用者が多いと予想された同年７，８月に白神山地ＶＣで面接式調査を行った。展示ホール見学直後の 18 歳以上の日本人利用者を無作為に抽出し，協力依頼に対して同意を得た者に回答を求めた。ANMON における調査は，利用者数の少なさ，回答に適した屋内空間の不足を考慮して，ANMON 施設職員の協力を得て，18 歳以上の日本人利用者に調査票を配布する方法を採用し，7～11 月の期間に郵送回収式調査を行った。そのほか，同年６月に白神山地ＶＣ，ANMON，西目屋自然保護官事務所，青森県自然保護課においてＶＣの利用の現状と課題を把握するヒアリング調査を実施し，最終的には 2018 年３月に白神山地ＶＣにおいて調査結果に関する報告会と意見交換会を開催した。

その結果，マタギ等の文化に関する情報は地域情報としてニーズがあることが明らかとなった。また，ＶＣと比較して ANMON では巡回，窓口，休憩避難，指導教化の機能が求められており，文化情報を含めた地域情報の発信とＶＣ機能の強化にむけては，ＶＣサテライトの設置等が有効と考えられた。さらに，ＶＣ職員を対象とするヒアリング調査，ワークショップから，白神山地ＶＣは最重要の運営目標として来館者数の増加を掲げ，世界自然遺産の普遍的価値を

伝えるための月約２回の自主事業においても収益より来館者数の増加を優先していた。しかし，予算規模は 2006 年度の１億２千万円から 2017 年度には７千万円まで縮小し，職員の不足等から，来館者に対するインタープリテーションが積極的には行えていないなどの課題がみられた（佐々木啓・山本，2017ab；2018）。

（２）岩手山

標高 2,038 メートルの薬師岳を頂上とする岩手県の最高峰，岩手山は日本百名山の一つに数えられており，多くの登山者があると同時に活火山でもある（岩渕，2013）。文献調査から，頂上に到達できる主要登山ルートの数については定まった見解がないものの複数あった。また，定期的に公表される登山者数データはなく，2005 年の報告（国土交通省，1998）では柳沢ルートで最も登山者数が多く，次いで，焼走りルートで多かった。なお，2001-2004 年度の年平均登山者数は柳沢ルートで 13,683 人，焼走りルートで 6,079 人だった。岩手山に関する研究成果の多くは火山防災に関するもの（代表的なものとして，国土交通省，1998（前掲））であり，登山や国立公園利用，山岳遭難事故に関する知見は見あたらなかった。そのほか，本研究における主要テーマではないが，過去の山岳遭難事故を把握整理した結果，1967 年 11 月に大学のワンゲル部が遭難し，３人が死亡する事故（毎日新聞，1967）があり，近年では，2005 年４月に冬山経験を持つ登山歴 40 年のベテランハイカーが，同行者と別行動をとり遭難死する事故（朝日新聞，2005）が起きていた。岩手山に関しては，山岳遭難事故を防ぐための知見を蓄積できた（久保・山本，2016；2017）ものの，文化資源についてはインベントリーの整理（未公表）作業に留まり，地域住民を対象とするワークショップの開催，資源の再評価の作業には至らなかった。

（３）三陸沿岸部

2011 年の東日本大震災により被災した沿岸部では，自然の恵みと脅威と向き合ってきた人の歴史，経緯をどのように地域に残し，継承できるか，そのような観点から調査を実施した。

まず，東日本大震災から６年が経過し，復興過程にある被災地石巻市を取り上げ，来訪者の意識，行動の把握から，①ダークツーリズムの実態，特徴を明らかにすること，②ダークツーリズムの課題と可能性を論じ考察すること，の２点を目的とする調査を 2017 年夏季に実施した。その結果，石巻市はダークツーリズムの対象地として機能し，震災は後世に伝承し，世界で共有する価値があると捉えられていた。また，被災地における臨場感は来訪者の災害に対する意識変化を促し，震災遺構や語り部ガイドは災害伝承方法として効果的と考えられていた。しかし，語り部ガイドの認知度は低く，復興を含む被災地の変化を想定した災害伝承方法論の検討が求められていた（佐々木薫子・山本，2016；2017ab；佐々木薫子・山本・山本，2018）。

また，災害の伝承という観点から津波防災教育に関する活動事例を情報収集し，①共通性と差異性など，日本における津波防災教育の特徴を把握，整理すること，②地域の場所の活用，地域住民の関与，参画による観光との組み合わせ可能性を検討することを目的とする調査を 2016 年秋季に実施した。その結果，津波防災教育は，主に学校教育において児童，生徒を対象に展開され，学年の進行とともに防災教育を展開する機会が減少していく傾向にあった。また，津波防災教育を多くの観光客や地域外の住民を対象として実施すると想定した場合，活動場所として学校外の場所の活用が考えられ，自然の「脅威」だけでなく「恵み」を伝えることが重要と考えられた（佐藤・山本，2016）。

さらに，三陸沿岸部の半島において小さな集落が持つ危機対応力の実証と，災害からの復興支援を意図する調査を実施した。たとえば，釜石市の尾崎半島は歴史的に信仰の地としてだけなく，自然歩道の活用等により観光地としても機能してきた。しかし，半島集落の人口減少，少子高齢化，2011 年の東日本大震災からの復興が課題となっており，地域の活性化が求められている。そこで本研究では，佐須集落で地域の観光資源の発掘を行うこと，発掘した資源の整理から，ガイドツアープログラムの内容の検討を行うこと，の２点を目的として，集落住民への聞き取り調査，トレッキングコースの検討を意図した現地調査を 2016 年に実施した。結果から，半島の地域資源マップを作成し，住民の思い出を継承し，集落間の関係性を含めた昔の生活を巡るツアープログラムの企画が可能と考えられた（地本・山本，2016）。しかし，尾崎半島では 2011 年の東日本大震災に加え，2017 年の森林火災により森林資源が被災したため，研究期間中の調査活動の目標を修正し，津波災害と森林火災の両者からの復興を目指した。そこで，焼失したトレイル階段の木枠を石積みで再整備するワークショップを通じ，人工や時間など必要な活動規模について導出した上で，石積み活動の継続性，技術に関わる課題について論考し，観光プログラムとしての展開可能性を示した（齋藤・山本，2017）。加えて，千畳敷をはじめとする自然資源，人間の営みの歴史・文化資源を有する釜石市箱崎半島においても調査活動を展開した。半島では，震災によって人口減少が加速し，半島の伝統，文化の継承，地域活性化は大きな課題である。そこで調査では，みちのく潮風トレイルの活用を企図し，被験者によって撮影された写真の分析を通して，箱崎半島の観光資源性評価を行い，ガイドプログラムの構築にむけて提言を行うことを目的とした。結果から，半島の自然，文化資源は様々な角度，距離で撮影されており，ガイドによる解説の提供，撮影の視点場，対象場の保護と活用を提案できた。また，撮影行動の生起場所と危険箇所には空間的な重なりがあり，ガイド同伴の必要性を指摘した（佐々木薫子・山本，2017c）。そのほか，東北の観光復興にむけて，ガイドまち歩き

において生活や生業が観光資源になりうること（地本・山本，2016；地本・山本・木下，2018），デジタルデトックスの場として三陸沿岸部など自然豊かな場所に活用可能性があること（久保・山本，2016abc），などを明らかにした。

地域の利害関係者とともに文化資源の再評価を行う作業としては，2016 年 10 月に岩手県大槌町において国立公園フォーラムを実施した。その結果，地域住民やサーファーが主体となり，民間資金を導入しつつ津波によって消失した白砂青松の海岸の再生の経緯を確認でき，海との繋がりそのものが地域の資源として再評価されていた（未発表）。

（４）富士山

地域の文化資源の一つとして風景を取り上げて，その風景における三保松原と富士山との関係の変遷について絵画分析を通して明らかにすること，現代における三保松原来訪者が富士山に向けた風景に対する認識を調査し，風景地としての今後の利用と保全管理の方向性について考察することを目的とする調査を実施した。その結果，室町時代以降の絵画分析を通して，三保松原と富士山の関係は大きく４つの時期に区分することができ，それぞれを名付けるとすれば「信仰」時代，「構図」時代，「営み」時代，「主題」時代，とも言うべき変遷を経てきたと考察された。また，信仰や生活に関わる意味を象徴する風景認識と，あるがままの真景である視覚的な風景認識とが，各時代の社会状況に応じて比重を変えながら捉えられてきたことが示された。さらに，富士山は信仰の対象から鑑賞の対象へ，松原は富士登拝の過程における俗界からの出入口から富士山との取り合わせを生み出す重要な風景要素へと位置づけが変化してきており，両者の関係については，信仰面でのつながりが表されていた時代から，次第に信仰面での関係性は希薄化し，構図としての関係，そして日本を象徴する画題としての二大要素としての関係へと変化してきたことが示唆された。一方，アンケート調査の結果から，世界文化遺産としての価値，とくに信仰と富士山との関係性の理解が現代の来訪者の間で不十分であることが示唆された。三保松原が存在する三保半島は開発により多くの松林を失ったが，残された駿河湾沿いの松林に関しても，現在松枯れ等による植生の後退が大きな問題となっており，海岸侵食による砂浜の減少も指摘され，松原を保全・回復していくことも重要課題と考えられた（大竹・山本・下村，2017）。そのほか，富士山では，登山者数の上限設定，富士山保全協力金の協力率の低下，混雑緩和にむけた積極的な取り組み，急増する外国人に対する対応が求められており（山本，2016；山本・ジョーンズ，2017；山本，2018；Jones et al.,2016），それらの課題に関わる研究成果をとりまとめた。

地域の利害関係者とともに文化資源の再評価を行う作業としては，2017 年６月に山小屋の歴史的概観をテーマとする勉強会を開催し，山小屋の外観の変遷を整理しつつ討論した。その結果，山小屋の外観を継承する上で石垣などの重要な景観要素があること，登山形態，登山志向の変化に対応した改修，リノベーションの際に外観に変化が生じてきたことを確認し，山小屋景観を歴史的な観点から再評価できた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 14 件）

１）査読付論文

(1) 地本真菜・山本清龍・木下勇（2018）：ガイドの有無によるまち歩き体験と地域の生活への眼差しの差異：環境情報科学 47(2)，70-75（ISSN：0389-6633）
(2) 山本清龍（2018）：富士登山者による混雑予想カレンダーの利用と混雑回避：環境情報科学学術研究論文集 32，155-160（ISSN：0389-6633）
(3) 佐々木薫子・山本清龍・山本信次（2018）：東日本大震災後の石巻市の来訪者意識にみるダークツーリズムの課題と可能性：環境情報科学学術研究論文集 32，161-166（ISSN：0389-6633）
(4) 大竹芙実・山本清龍・下村彰男（2017）絵画にみる三保松原と富士山との関係の変遷と現代の風景認識に関する研究：ランドスケープ研究 80(5)，569-574（ISSN：1340-8984）
(5) 久保暁子・山本清龍（2017）：岩手山登山者を事例とする登山計画書の提出に関わる意識に関する研究：環境情報科学学術研究論文集 31，171-176（ISSN：0389-6633）
(6) 山本清龍・ジョーンズ＝トマス＝エドワード（2017）：富士山保全協力金の支払行動を規定する因子に関する研究：環境情報科学学術研究論文集 31，189-194（ISSN：0389-6633）
(7) 山本清龍（2016）：富士山の登山者数の上限設定に対する登山者の意向：環境情報科学学術研究論文集 30，73-78（ISSN：0389-6633）
(8) 久保暁子・山本清龍（2016）：岩手山の登山者を事例とする単独登山志向と事故リスク削減に対する意識の関係に関する研究：環境情報科学学術研究論文集 30，279-284（ISSN：0389-6633）

２）査読無論文

(1) 佐々木啓・山本清龍（2017a）：白神山地ビジターセンターの展示に対する来館者の注視行動と意識：日本観光研究学会全国大会学術論文集 32，149-152
(2) 佐々木薫子・山本清龍（2017a）：石巻市における東日本大震災後のダークツーリズムの実

態と課題：日本観光研究学会全国大会学術論文集 32，341-344
(3) Thomas E. JONES, Kiyotatsu YAMAMOTO (2016): Visitor Perspectives of UNESCO World Heritage Site Branding: A Comparative Study of Domestic and International Climbers at Mount Fuji: Proceedings of JITR (Japan Institute of Tourism) Annual Conference 31，77-78
(4) 久保暁子・山本清龍（2016a)：デジタル機器の利用とデジタルデトックスにむけた意識に関する研究：日本観光研究学会全国大会学術論文集 31，217-220
(5) 地本真菜・山本清龍（2016)：ガイドの有無によるまち歩き観光体験の質と観光志向の差異：日本観光研究学会全国大会学術論文集 31，277-280
(6) 佐藤太陽・山本清龍（2016)：津波防災教育の特徴と観光への展開可能性の検討：日本観光研究学会全国大会学術論文集 31，369-372

〔学会発表〕（計 18 件）
１）国内学会
(1) 山本清龍（2018b)：津波災害の伝承の方法論に関する一考察：第 129 回日本森林学会大会学術講演集，210（高知県高知市，高知大学）（ISSN：2187-6576）
(2) 佐々木啓・山本清龍・比屋根哲（2018)：白神山地ビジターセンターの利用実態と環境教育施設としての役割：日本環境教育学会第 29 回大会（東京）研究発表要旨集，128（東京都小金井市，東京学芸大学）
(3) 佐々木啓・山本清龍・村田青葉（2018)：宮古・下閉伊地域の流域に関わるステークホルダーの意識と保全活動の方向性の提案：日本環境教育学会東北地区環境教育・研究活動発表会（東北支部大会）（福島大学）
(4) 山本清龍（2018)：シカによる尾瀬国立公園の湿原への影響の認知度と管理施策に対する支持意向：平成 30 年度日本観光研究学会東北支部大会（第 4 回大会)，（宮城県仙台市，宮城学院女子大学）
(5) 山本清龍（2017)：太平洋沿岸部の住民が認識する海の恵みと脅威-三陸沿岸部と土佐湾沿岸部の比較：第 128 回日本森林学会大会学術講演集，179（鹿児島県鹿児島市，鹿児島大学）（ISSN：2187-6576）
(6) 佐々木啓・山本清龍（2017b)：白神山地ビジターセンターにおける文化資源情報の発信と利用：日本環境教育学会第 28 回大会（岩手）研究発表要旨集，48（盛岡市，岩手大学）
(7) 佐々木薫子・山本清龍（2017b)：語り部ガイドによる東日本大震災の伝承と震災遺構の活用：日本環境教育学会第 28 回大会（岩手）研究発表要旨集，63（盛岡市，岩手大学）
(8) 佐々木薫子・山本清龍（2017c)：写真分析を通した釜石市箱崎半島の観光資源性評価とガイドプログラム開発：平成 29 年度日本観光研究学会東北支部大会（第 3 回大会)，（福島県福島市，福島大学）
(9) 齋藤雅晃・山本清龍（2017)：釜石市尾崎半島のトレイルの整備と地域の活性化：平成 29 年度日本観光研究学会東北支部大会（第 3 回大会)，（福島県福島市，福島大学）
(10) 久保暁子・山本清龍（2016b)：デジタル機器の利用とデトックスにむけた意識に関する研究：東北森林科学会第 21 回大会，（盛岡，岩手大学）
(11) 山本清龍・坂拓弥（2016)：三陸復興国立公園における来訪者の利用と意識：第 15 回日中韓国際ランドスケープ専門家会議，（東京，東京大学）
(12) 地本真菜・山本清龍（2016)：岩手県釜石市佐須集落における観光資源の発掘：平成 28 年度日本観光研究学会東北支部大会（第 2 回大会)，（酒田，東北公益文科大学）
(13) 佐々木薫子・山本清龍（2016)：石巻市の復興計画にみる音風景の保全の可能性：平成 28 年度日本観光研究学会東北支部大会（第 2 回大会)，（酒田，東北公益文科大学）
(14) 久保暁子・山本清龍（2016c)：デジタルデトックスにむけた農村空間の利用可能性に関する研究：平成 28 年度日本観光研究学会東北支部大会（第 2 回大会)，（酒田，東北公益文科大学）
２）国際学会
(1) Mana CHIMOTO, Kiyotatsu YAMAMOTO (2018): Differences in the Quality of Experience and Viewing Direction of Guided and Non-Guided Walkers toward the Local Community Living in the Town Area: Japan Geoscience Union Meeting 2018 (Chiba, Japan, May 20-24)
(2) Satoshi SASAKI, Kiyotatsu YAMAMOTO (2018): Possibility of Utilization and Challenges of Visitor Center for Cultural Value Inheritance in World Heritage Shirakami Sanchi: Japan Geoscience Union Meeting 2018 (Chiba, Japan, May 20-24)
(3) Kiyotatsu YAMAMOTO (2017): Discovering Tourism Resources in the Two Fishing Villages of the Ozaki Peninsula in Kamaishi City, Iwate, Japan: Japan Geoscience Union Meeting 2017 (Chiba, Japan, May 20-24)
(4) Fumi OTAKE, Kiyotatsu YAMAMOTO, Akio SHIMOMURA (2017): Intention to Use the National Park and Geopark for Disaster Risk Reduction: A Case Study of Sanriku Tsunami-hit Area: Japan Geoscience Union Meeting 2017 (Chiba, Japan, May 20-24)

〔図書〕（計２件）

(1) 山本清龍（分担執筆）：白坂蕃・稲垣勉・小沢健市・古賀学・山下晋司編集（2019）：観光の事典（第 5 章 14 節『自然地の観光振興』，第 5 章 16 節『農林漁業と観光振興』）：朝倉書店，246-247，250-251（ISBN-13：978-4254163575）
(2) 山本清龍（分担執筆）：日本造園学会・風景計画研究推進委員会監修，古谷勝則・伊藤弘・高山範理・水内佑輔編集（2019）：実践風景計画学-読み取り・目標像・実施管理（第２章３節『目標像の共有』，第４章３節２項『ゾーニングとその意義』）：朝倉書店，45-48，89-92（ISBN-13：978-4254440294）

〔その他〕
(1) 山本清龍（2018c）：国立公園と観光のこれから-自然観光地としての管理，計画，地域との協働：観光研究 29(2)，100-105（ISSN：1342-0208）
(2) 山本清龍・深町加津枝・柴田昌三・渡辺綱男・奥敬一・小林広英・三好岩生・島田和久（2018）：里山里海のライフスタイルと危機対応能力（平成 30 年度日本造園学会フォーラム報告）：ランドスケープ研究 82(2)，199
(3) 菊池佐智子・山本清龍・本郷哲郎・長谷川達也（2017）：富士山の世界文化遺産登録直後の青木ヶ原樹海利用者の満足度：環境情報科学 46(3)，78-83
(4) 山本清龍他（2017）：日本遺産認定シンポジウム「中芸みんなの日本遺産」レポート：季刊高知 67，35-41
(5) 広田純一・山本清龍・柴田亮（2016）：岩手県三陸沿岸地域の観光振興-持続可能な地域づくりにむけて：観光文化 229，16-22（ISSN：0385-5554）

ホームページ等
(1) みちのく潮風トレイル：普代村区間のハイカーむけ情報サイト
＜https://www.facebook.com/みちのく潮風トレイル普代村区間のハイカーむけ情報サイト-297031204142768/?modal=admin_todo_tour＞

６．研究組織

なし